HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	昭和戦前期の北海道第2区における政党間競合 : 道北と政党 （続）
Author(s)	井上, 敬介
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 158, 1(左)-35(左)
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.158.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75215
Type	departmental bulletin paper
File Information	158_05_Inoue.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 158 （2019）

昭和戦前期の北海道第２区における政党間競合
── 道北と政党（続）──

井　上　敬　介

序

本論は，拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」の続編であり[1]，政党と候補者の視角から昭和戦前期の北海道第２区における政党間競合の変遷過程を検討することによって，道北の政治状況が二大政党（立憲政友会と立憲民政党）の時代から，多党化の時代に移行していったことを明らかにする。そのことを通して，以下の問題解決を試みる。

第１に，北海道における地元出身代議士と有権者の投票行動との関係である。升味準之輔氏は『日本政党史論』（第５巻）において近代日本の全代議士の経歴を集計し，戦間期（日露戦争と第一次世界大戦）を境に，府県会議員（地方政治家）の経歴を有する代議士が激減する一方で，実業関係者や高級官僚出身者（地方政治家としての経歴を持たない）の代議士が増加したことを明らかにした[2]。他方，拙著『戦前期北海道政党史研究』は，北海道選出代議士の大部分が地方政治家（北海道会議員）の経歴を有していたことを指摘した[3]。北海道の地方政治状況を選挙区ごとに検討する作業は，日本政党史研究に厚みを加えることになるだろう。本論では，道北選出候補の地方的側面に着目する。

第２に，集団投票が北海道において行われていたかということである。浅野和生氏の「戦前総選挙における集団投票」は熊本第１区を事例に各選挙（第１～５回普通選挙）の候補者間の得票分布を検討し，「選挙区全体としては同

10.14943/bfhhs.158.l1

一政党の候補者が複数であっても，各町村の内部では一人の候補者だけが得票しており，同一政党の候補者間で票の奪い合いが見られないことが判明した」ことを明らかにし，「我が国の総選挙では，個人が候補者を選択する余地はなかった」と評している[4]。これに対して，本論では道北の町村において，同一政党の票の奪い合いが生じていたことを指摘する。

第３に，北海道における政民両党の地方組織と候補者の個人後援会の存在である。山室建徳氏の「一九三〇年代における政党基盤の変貌」が第３回普通選挙における新潟３区，奥健太郎氏の『昭和戦前期立憲政友会の研究』は第１回普通選挙における栃木２区を事例に，集票活動は政党組織（各郡単位の政党支部）によって行われていたことを明らかにした[5]。他方，手塚雄太氏の『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』は，政友会の加藤鐐五郎（名古屋１区）の個人後援会の実態を明らかにした[6]。本論では，道北における地方組織と個人後援会の一端を明らかにする。

本論は，拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」において作成した北海道第２区の「候補者別得票数」を踏まえた上で，新たに作成した「政党別得票数」と旭川市中央図書館所蔵マイクロフィルム『旭川新聞』を用いて[7]，上記の３点を検討し，昭和戦前期北海道の地域社会における政党と選挙の実態を解明する作業の一環とする[8]。

［表１］　上川支庁管内町村における政党別得票数（1）

東鷹栖村	政	民	他	神楽村	政	民	他	比布村	政	民	他
(1)	625	329	100	(1)	815	649	90	(1)	575	272	155
(2)	563	504	60	(2)	898	715	25	(2)	575	417	65
(3)	906	392	0	(3)	1,412	492	0	(3)	904	259	0
(4)	424	616	300	(4)	656	865	617	(4)	338	404	391
(5)	331	489	535	(5)	451	720	801	(5)	211	309	574
神居村	政	民	他	**東旭川村**	政	民	他	**鷹栖村**	政	民	他
(1)	467	108	27	(1)	1,230	493	279	(1)	658	289	319
(2)	414	164	6	(2)	1,247	756	96	(2)	702	381	168
(3)	571	128	0	(3)	1,785	526	0	(3)	1,025	339	0
(4)	233	224	312	(4)	751	775	722	(4)	665	516	275
(5)	154	253	327	(5)	532	600	928	(5)	395	386	453
東川村	政	民	他	**上川村**	政	民	他	**永山村**	政	民	他
(1)	768	268	124	(1)	539	145	18	(1)	888	486	102
(2)	713	443	25	(2)	528	309	10	(2)	758	661	66
(3)	988	306	0	(3)	768	189	0	(3)	1,234	517	0
(4)	412	517	369	(4)	247	222	413	(4)	231	386	525
(5)	241	504	432	(5)	160	340	394	(5)	169	290	613
当麻村	政	民	他	**愛別村**	政	民	他	**江丹別村**	政	民	他
(1)	1,344	104	34	(1)	768	247	51	(1)	214	115	27
(2)	1,160	294	34	(2)	572	501	22	(2)	174	209	9
(3)	1,409	164	0	(3)	847	314	0	(3)	313	130	0
(4)	42	140	1,528	(4)	317	392	553	(4)	168	148	103
(5)	18	105	1,486	(5)	134	724	335	(5)	70	120	172

1943 年，東神楽村，神楽村から分村。
神居，江丹別村は 1955 年，永山村は 1961 年，東旭川村は 1963 年，神楽村は 1968 年，東鷹栖村は 1971 年，旭川市と合併（合併時において，永山，東旭川，神楽，東鷹栖は町）。

［表２］　上川支庁管内町村における政党別得票数（2）

美瑛村	政	民	他	上富良野村	政	民	他	中富良野村	政	民	他
(1)	977	379	98	(1)	934	344	38	(1)	810	259	61
(2)	959	635	39	(2)	735	591	30	(2)	755	431	18
(3)	1,338	566	0	(3)	1,166	349	0	(3)	1,093	257	0
(4)	607	764	592	(4)	962	587	532	(4)	638	371	319
(5)	420	850	629	(5)	377	528	497	(5)	500	297	356
富良野町	政	民	他	**山部村**	政	民	他	**南富良野・占冠村**	政	民	他
(1)	1,035	542	184	(1)	472	306	77	(1)	625	300	91
(2)	1,174	656	109	(2)	472	604	23	(2)	695	370	51
(3)	1,551	590	0	(3)	775	421	0	(3)	946	250	0
(4)	928	789	559	(4)	393	554	373				
(5)	828	594	800	(5)	363	389	393				
南富良野村	政	民	他	**占冠村**	政	民	他				
(4)	364	261	296	(4)	130	85	89				
(5)	272	250	337	(5)	82	107	119				

1966 年，山部村は富良野町と合併し，富良野市となる（合併時において山部は町）。
第 1，2，3 回普通選挙において，南富良野村と占冠村は組合役場。
1932 年，南富良野，占冠組合役場から占冠村として独立。

［表３］　上川支庁管内町村における政党別得票数（3）

和寒村	政	民	他	多寄村	政	民	他	温根別村	政	民	他
(1)	544	252	347	(1)	1,011	231	161	(1)	284	111	8
(2)	544	596	65	(2)	996	463	83	(2)	348	96	1
(3)	806	554	0	(3)	1,433	406	0	(3)	463	47	0
(4)	168	684	514	(4)	785	881	302	(4)	163	112	280
(5)	118	462	690	(5)	691	830	447	(5)	225	82	228
下川村	政	民	他	**智恵文村**	政	民	他	**剣淵村**	政	民	他
(1)	399	184	56	(1)	247	118	41	(1)	612	299	27
(2)	467	256	10	(2)	236	132	45	(2)	599	365	21
(3)	779	164	0	(3)	391	88	0	(3)	873	252	0
(4)	649	405	128	(4)	171	174	149	(4)	333	375	487
(5)	534	384	257	(5)	129	330	93	(5)	362	415	447
名寄町	政	民	他	**士別町**	政	民	他	**上士別村**	政	民	他
(1)	1,275	583	110	(1)	899	734	185	(1)	764	317	34
(2)	1,328	811	78	(2)	799	1,022	78	(2)	839	405	12
(3)	1,878	629	0	(3)	1,399	812	0	(3)	1,150	238	0
(4)	792	623	1,075	(4)	584	1,219	471	(4)	631	495	353
(5)	746	660	892	(5)	681	784	553	(5)	662	495	290
美深町	政	民	他	**常盤村**	政	民	他	**中川村**	政	民	他
(1)	585	468	34	(1)	270	175	20	(1)	493	29	16
(2)	710	603	23	(2)	317	224	16	(2)	562	73	6
(3)	1,118	466	0	(3)	371	180	0	(3)	741	86	0
(4)	603	886	211	(4)	199	210	173	(4)	628	211	96
(5)	627	1,021	50	(5)	171	286	113	(5)	481	311	140

1938 年，多寄村が改称して風連村となる。風連村から多寄村が分村。
1949 年，上士別村から分村，朝日村となる。
1954 年，士別町，多寄，温根別，上士別村を合併し，士別市となる。名寄町，智恵文村と新設合併される。
1963 年，常盤村，音威子府村に改称。
2005 年，朝日町，士別市に合併。
2006 年，風連町，名寄市に合併。

［表 4］　宗谷支庁管内町村における政党別得票数

稚内町	政	民	他	宗谷村	政	民	他	猿払村	政	民	他
(1)	1,171	944	82	(1)	200	124	3	(1)	314	187	15
(2)	1,301	1,181	81	(2)	128	165	5	(2)	346	298	11
(3)	2,069	1,023	0	(3)	225	128	0	(3)	406	257	0
(4)	1,265	1,389	472	(4)	132	201	80	(4)	179	224	222
(5)	985	1,003	739	(5)	130	122	96	(5)	174	148	368
頓別村	政	民	他	**中頓別村**	政	民	他	**枝幸村**	政	民	他
(1)	488	204	11	(1)	541	183	23	(1)	532	319	4
(2)	516	264	3	(2)	529	329	9	(2)	533	476	20
(3)	732	186	0	(3)	695	159	0	(3)	877	368	0
(4)	418	286	224	(4)	468	306	186	(4)	672	678	286
(5)	359	214	240	(5)	387	321	289	(5)	623	522	364
香深村	政	民	他	**船泊村**	政	民	他	**鴛泊村**	政	民	他
(1)	343	271	2	(1)	329	106	0	(1)	115	428	1
(2)	198	521	13	(2)	240	244	3	(2)	193	436	8
(3)	379	404	0	(3)	281	163	0	(3)	380	252	0
(4)	197	474	76	(4)	93	295	100	(4)	89	324	162
(5)	223	322	121	(5)	126	167	141	(5)	146	171	249
沓形村	政	民	他	**仙法志村**	政	民	他	**鬼脇村**	政	民	他
(1)	600	89	12	(1)	290	161	0	(1)	432	172	0
(2)	487	251	5	(2)	338	173	2	(2)	366	292	0
(3)	602	194	0	(3)	424	100	0	(3)	561	111	0
(4)	394	255	142	(4)	301	85	171	(4)	206	181	225
(5)	330	140	151	(5)	124	35	81	(5)	166	106	221

1939 年，歌登村，枝幸村から分村。
1951 年，頓別村，浜頓別町となる。
1955 年，宗谷村，稚内市に編入される。
1956 年，船泊，香深村が合併して礼文村，鴛泊，鬼脇村が合併して東利尻村，沓形，仙法志村が合併して利尻町となる。
1990 年，東利尻町，利尻富士町に改称。
2006 年，枝幸町，歌登町と対等合併。

［表５］　留萌支庁管内町村における政党別得票数

増毛町	政	民	他	留萌町	政	民	他	小平蘂村	政	民	他
(1)	884	420	24	(1)	1,203	661	50	(1)	294	185	17
(2)	1,186	553	43	(2)	1,383	831	53	(2)	311	273	20
(3)	1,793	349	0	(3)	1,909	708	0	(3)	600	185	0
(4)	1,303	530	379	(4)	1,393	1,178	322	(4)	350	268	150
(5)	873	304	584	(5)	1,134	700	594	(5)	337	237	289
鬼鹿村	政	民	他	**苫前村**	政	民	他	**羽幌町**	政	民	他
(1)	337	180	2	(1)	360	388	21	(1)	565	404	56
(2)	359	253	3	(2)	328	539	23	(2)	594	586	16
(3)	538	146	0	(3)	751	386	0	(3)	967	407	0
(4)	319	188	171	(4)	541	558	128	(4)	721	501	288
(5)	266	146	211	(5)	469	433	266	(5)	518	299	354
初山別村	政	民	他	**遠別村**	政	民	他	**天塩町**	政	民	他
(1)	396	189	5	(1)	464	181	0	(1)	468	339	3
(2)	412	141	0	(2)	467	172	1	(2)	535	397	0
(3)	633	75	0	(3)	610	131	0	(3)	838	303	0
(4)	357	83	238	(4)	519	216	103	(4)	463	392	185
(5)	346	70	242	(5)	461	199	180	(5)	442	326	240
幌延村	政	民	他	**天売村**	政	民	他	**焼尻村**	政	民	他
(1)	684	195	18	(1)	225	30	0	(1)	137	132	0
(2)	743	365	25	(2)	197	78	0	(2)	135	151	0
(3)	1,158	346	0	(3)	228	58	0	(3)	167	138	0
(4)	886	381	230	(4)	215	70	18	(4)	219	93	9
(5)	784	372	429	(5)	206	36	34	(5)	199	84	25

1940 年，幌延村から豊富村を分村。
1948 年，小平蘂村，小平村と改称。豊富村，留萌支庁から宗谷支庁へ管轄が以降。
羽幌町，1955 年に天売村，1959 年焼尻村を編入。
1956 年，小平村，鬼鹿村を編入。
2010 年，幌延町，宗谷総合振興局へ管轄が以降。

第 1 章　政党内閣期における北海道第 2 区の政治状況

本章は，政党内閣期における 3 度の普通選挙と北海道第 2 区の関係を政党と候補者の観点から検討する。

第 1 節　第 1 回普通選挙と東武の地盤協定破棄

1928 年 2 月の第 1 回普通選挙（田中義一政友会内閣が実施）における北海道第 2 区の当選者は東武（政友会），林路一（政友会），坂東幸太郎（民政党），浅川浩（民政党），落選者は近藤豊吉（政友会），荒岡庄太郎（労働農民党），堀井久雄（日本農民党，非公認）である。

1 月 25 日，旭川政友倶楽部は，北海道第 2 区の候補者推薦に関する協議会を開催した。協議会には，旭川市の有力者，上川，宗谷，留萌支庁管内の同志 60 人が参加した。同会では 2 人擁立説が浮上したが，東，林，近藤の擁立を決定した。なお，稚内政友倶楽部は同日の幹部会において，3 人の擁立を危険と見て，2 人の擁立を申し合わせていた。他方，同日の上川西部政友同志会（神居，神楽村の有力者が参加）の幹部会は林擁立を決定していた。29 日，神居村政友同志会は林の後援会組織のための準備委員会を開催した。林は上川郡農会副会長であり，上川支庁管内の町村長会に影響力を持っていた[9]。なお，出身の当麻村にはすでに林の個人後援会が存在し，強靭な結束力を誇っていた[10]。他方，26 日の『旭川新聞』によると，和寒村以北は近藤の地盤であり，近藤の立候補を要望する勢力が少なくなかったと言う[11]。政友会の 3 人擁立の背景に，上川支庁管内における林，近藤の支持者からの強い要請があったことは看過できない。

留萌支庁管内に着目すると，留萌町の民政党有志は旭川民政党同志会の栗山弘忠幹事長に対して，中西六三郎（民政党の元代議士）の擁立，それが困難な場合，中川健蔵（前北海道庁長官）の擁立を建策した。民政党支部は中川との直接交渉のため，密使を上京させた[12]。中西は政友本党候補として 1924 年 5 月の第 15 回衆議院議員総選挙を政友会の東，憲政会の浅川と戦い，

惜敗した経験を持つ実力者である（当選４回）。中川は民政党系の道庁長官であり，田中内閣の成立とともに更迭されていた。すなわち，中西と中川の擁立の意図は東の打倒にあった。なお，留萌政友倶楽部の発足は原敬内閣期の 1919 年 6 月 24 日にまで遡る。発会式には約 400 人（増毛町からの有力者数人を含む）が参加し，宣言において政友会の積極政策支持を表明し，留萌築港完成，天塩沿岸の鉄道速成，増毛などの漁港修築が決議された[13]。1921 年 8 月 12 日，東は山本悌二郎総務とともに留萌町を訪問し，13 日には留萌築港を視察している[14]。山本は，札幌区における政友会東北大会（８月 10 日開催）に参加した原首相に随行していた。東は東北大会の代議士会長だった。23 日の政友会幹部会において，山本は東北大会の経過報告を行っている[15]。これらのことからは，東と山本の留萌港視察と政友会の党勢拡張との緊密な関係が推察される。鉄道に関して見ると，留萌線建設は 1907 年 2 月から開始されたが，当時，菊亭農場の管理人だった東は深川村までの路線確定に関与していた[16]。1924 年 5 月の第 15 回総選挙（北海道第８区）において，東は留萌支庁管内において 683 票を獲得し，386 票の浅川，298 票の中西を圧倒している[17]。東が留萌支庁管内町村に強固な選挙地盤を構築していたことは明らかだろう。

ここで，第１回普通選挙に視点を戻し，北海道第２区における民政党の候補者擁立過程に着目する。1928 年 1 月 25 日，旭川民政党同志会は，旭川市の村松屋旅館において，候補推薦協議会を開催した。協議会には旭川市，士別町，比布村，留萌，増毛，羽幌，天塩町，頓別村から有力者が参加した。協議は満場一致で浅川の擁立を決定したが，残る１人の擁立を巡って紛糾した。中西の擁立が高唱される一方で，坂東を推す勢力もあった。最終的には，名寄町の水上政治（道議）と旭川市の友田文次郎（元代議士，旭川市会議長）の決選投票となった。投票結果は水上 25 票，友田 11 票，白票３票，考慮中１票で，水上擁立に決定した[18]。さらに，坂東が復党した場合，浅川と水上とともに，北海道支部と本部の公認を求めることに決定した。同日，旭川市の後援者と郡部有志は旭川民政党同志会の意向を受けて坂東宅に集合し，坂東に民政党復党を要請した[19]。1924 年 5 月の第 15 回総選挙（北海道第４区）に

おいて，憲政会の友田は新正倶楽部の坂東に敗れた。旭川市における坂東の得票数 851 票に対して，友田は 389 票にすぎなかった[20]。旭川民政党同志会が坂東擁立に固執したのは旭川市における政民両党の党勢が拮抗しており，当選可能性が高い候補を必要としたためだろう。1928 年 1 月 27 日の『北海タイムス』によると，水上の擁立は坂東の競合相手である友田の出馬を牽制するための方便であり，水上に出馬意思はなかったと言う。さらに，枝幸村の三浦重吉（道議）を推す声もあったが反対者が多く，出馬は困難な状況だった。26 日に坂東は民政党に復党し，27 日には立候補に決定した。坂東の復党に際し，床次竹二郎，安達謙蔵ら党幹部が仲介を行っている[21]。27 日，中西は北海道第 1 区からの出馬を決め，28 日の民政党支部幹部会は「濫立の不利益を戒め」，浅川と坂東の公認を決定，水上に関しては保留とした。29 日，水上は名寄町の有志と会合し，出馬を辞退した。留萌町の民政党有志は，中川が決起すれば，旭川市において本格的な運動を展開する思惑だったが[22]，中川は出馬しなかった。友田の応援者は除名処分も辞さず，29 日から擁立運動を開始したが，２月 5 日に友田は出馬を辞退し，旭川民政党同志会の分裂は回避された[23]。

他方，旭川政友倶楽部は上川支庁管内において，時局批判演説会を展開した。同会は 1 月 28 日に山部村，29 日に金山市街地の富士製紙工場倶楽部，30 日に剣淵村と士別町において開催された。留萌政友倶楽部の選挙対策もまた，迅速だった。25 日の代表者会合に参加した高橋文平（道議）は 26 日に留萌政友倶楽部幹部会を開催し，29 日に増毛町及び羽幌町以南の各町村代表者と協議することを決定した[24]。民政党は出遅れたが，浅川は 30 日に出馬表表明を行い，水上が選挙事務長となった。三浦もまた，浅川の応援を行った[25]。２月 2 日には天塩国民政倶楽部が発会し，浅川の支持を決定した。その際，事務所を留萌，天塩両町に置き，遊説隊が組織された[26]。なお，1 月 28 日の『旭川新聞』は「民政党の浅川，坂東両氏の戦線は殆ど同一系統で，地盤の協定などは出来ないのみならず，出来得る可能性もない」，「三浦氏が立候補するとせば，直接の利益を受けるのは浅川，坂東両氏で，戦線を上川，留萌支庁管内並に旭川市だけに縮小することが出来るからであり，しかして

東氏の地盤とする宗谷支庁管内の投票を余ほど取り込まれて東氏一人大打撃を蒙る」と予想しており[27]，三浦の出馬辞退は東有利に作用したと言えるだろう。

政友会の問題は上川支庁管内における地盤協定が困難だったことである。林は「僕の方の地盤は旭川を中心に，この附近ときまつている，なにしろ，同党から東，近藤と先輩が出ているから，政友は連合国で三軍の攻守同盟が出来るよ。故に他を攻めるより，先づ自己を守れで，その変り本城からは蟻一匹追ひ出さないといふ固めの戦法なんだ」と語っている。２月３日の『旭川新聞』は「林候補の戦線は東，近藤両候補中より石狩上川郡，富良野線方面を侵害されぬ限りは遊説部隊を提げて闖入せぬといふ紳士的態度を以て専ら自分の地盤だけを守りつつある」と評している[28]。林は，1919 年から 1927 年まで出身の当麻村の村長を務めていた。1920 年の石北線分岐点争奪問題（旭川市と比布村）の際，林は当麻村に鉄道を通過させるため，村民の大多数を政友会に入党させた。林は旭川分岐期成会（旭川市，東旭川，当麻，愛別村）の会長となり，1921 年 11 月に旭川市を石北線の起点とすることに成功し，林の政界出馬の契機となった[29]。こうした背景があったため，1928 年の第１回普通選挙における林の得票数１位は旭川市周辺（東鷹栖，神楽，比布，神居，東旭川，美瑛，上富良野，中富良野，東川，上川，永山，当麻，愛別，和寒，江丹別村）である。他方，東は鷹栖村で得票数１位となり，東旭川，上富良野，中富良野，東川，上川，江丹別村において，林に次ぐ得票を得ている[30]。この結果は東が林との協定を破り，林の地盤に遊説隊を送ったためだろう[31]。

東は林との地盤協定を破っただけではなく，近藤の地盤の名寄町にも侵入した。２月４日の『旭川新聞』は，近藤派の地盤協定交渉に対して，「東派では名寄に事務所を設けて取れる限りの得票を獲得する計画だから，地盤の協定は一切罷ならぬと拒絶され，茲に於いて近藤候補は名寄町だけでも既に千票以上の違算を生ずることになつたから，さらに作戦計画の立直しを行ふものとみられる」と報じている。８日の同紙は近藤について「美深はかれの従来からの縁故関係があり，和寒を境として以北，士別，名寄と附近の沿線は

東派の信義が重んぜられる以上，相当の得点は予想される」と評している。さらに，16 日の同紙は近藤について「地元多寄村はいふまでもなく剣淵，美深，下川，上士別，温根別，中川の各町村主なる有志は挙げて同氏を推薦」したと報じている[32]。第 1 回普通選挙（上川支庁管内限定）における近藤の得票数 1 位は和寒村以北（多寄，温根別，下川，智恵文，剣淵，上士別村，美深町）に集中している。東は，名寄，士別町，常盤，中川村において，近藤の得票数を上回った[33]。「三軍の攻守同盟」は崩壊したと言えるだろう。

ここでは，東と近藤の対立の舞台となった名寄町に着目する。2 月 2 日，名寄政友倶楽部は名寄座に役員総会を開催した。同会には 60 余名が参加，荒木太三が座長となり，候補者選出のための党員総会の開催を決定した。4 日の党員総会は 300 名が出席し，東の推薦を満場一致で決定した[34]。9 日の『旭川新聞』によると，名寄政友倶楽部総会は水上派，近藤派，東派に分裂したが，東擁立に決定したと言う。同紙は「東派は石丸氏を中心として牧堂会の名によつてこれを支持し，近藤派は青年中，氏を支持せんとするものがあつて，同士討ちの形である」と観察する[35]。名寄政友倶楽部は 1927 年 8 月 23 日，東の名寄町訪問を機に発足した（幹事長は元名寄憲政派の重鎮の石丸滝蔵，副幹事長は太田鉄太郎。800 余名が参加）。その直後から，名羽線建設及び支庁設置のため，挙町一致で政友会への入党を企図した[36]。だが，1928 年 2 月 9 日の『旭川新聞』は名寄町に特派員を送り，「来て見れば，左程でもない挙町一致」と評している。同紙によると，名寄町有志（荒木，石丸，太田，三井基宣）は札幌市において元政友会代議士の「春日某」と密会し，「挙町一致，政友会に入党するから，名羽線をなんとかして呉れ」と要請した。「春日某」から「入党するなら，なんとかしやう」という言質を得た結果，「名寄の振興は一つに名羽線の解決にありと考へた所謂同志の面々には，同町の挙町的一大勢力を有する団体「振興会」の名によつて，まづ，部落部民を一堂に集め，同意を得ることになった」。「町民は町のためならと賛成するもの多きを加へたが」，民政党の水上と角館祥二郎は強硬に反対した。同紙の得票予想は，「政友二千と称されているが，実際は一千七，八百というところだらう。後の七百なんぼが民政の獲得数」というものだった[37]。「春日某」とは五私鉄

疑獄事件に関与していた春日俊文（小川平吉鉄相の側近）であろう。

［表３］を参照すると，第１回普通選挙における名寄町の得票数は政友会が1,275票，民政党が583票であり，政民両党ともに予想を下回っている。名寄町における得票数１位の東は851票であり，２位の近藤は360票にすぎない[38]。東の立候補宣言における「政治的主張」の第１項は「鉄道の普及速成」を掲げていた[39]。名寄政友倶楽部が東の擁立を決定したのは，代議士経験がない近藤よりも，農林政務次官の東のほうが小川鉄相に近いと判断したからだろう。なお，名寄民政倶楽部の発足は，浜口雄幸内閣期の1929年８月18日である[40]。名寄町の事例からは，政友会の積極政策が同党の候補者擁立過程に影響を及ぼしていたことがわかる。

ここまで検討してきたように，政友会候補は上川支庁管内の同一町村において同士討ちを展開した。［表１］，［表２］，［表３］を参照すると，第１回普通選挙では上川支庁管内の全町村において政友会の得票数は民政党を上回っている。だが，候補者別に選挙結果を見ると，林の出身の当麻村と近藤の出身の多寄村及び比布，神居村（林に集中）を除いた全町村において，政友会候補の得票は３者に分散していた。民政党に視点を転じると，政友会ほどではないが，得票は分散傾向にある。坂東が富良野町と東鷹栖，比布，美瑛，中富良野，東川，上川，愛別，下川，常盤村において浅川の２倍以上の得票数を獲得する一方で，浅川が坂東の２倍以上の得票数を獲得したのは，上士別村のみである。上記の町村以外では坂東と浅川の得票は拮抗しており，政友会と同様，民政党においても候補者間の同士討ちが展開されたことがわかる。

ここで視点を換えて，宗谷，留萌支庁管内及び旭川市の選挙結果に着目したい。［表４］を参照すると，第１回普通選挙では鴛泊村を除く宗谷支庁管内の全町村において政友会の得票数は民政党を上回っている。候補者別得票状況に着目すると，政友会では林への得票がほとんどなく，稚内町，宗谷，枝幸，香深，鴛泊，沓形，仙法志村において東に得票が集中している。だが，上記の町村以外では，東と近藤の得票数が拮抗している。民政党では，稚内町，猿払，中頓別，沓形村において，坂東と浅川の得票数が拮抗する一方で，

上記の町村以外では浅川が坂東の 2 倍以上の得票数を獲得している。宗谷支庁管内は東と浅川への得票の集中傾向が見られる一方で，同一政党候補の得票が分散した町村が少なくなかった。［表 5 ］を参照すると，第 1 回普通選挙では苫前村を除く留萌支庁管内の全町村において政友会の得票数は民政党を上回っている。留萌支庁管内の町村における候補者別得票状況に着目すると，政友会では全町村において東に得票が集中し，林と近藤の得票はほとんどない。林と近藤は東の地盤を脅かさなかったにもかかわらず，東は両者の地盤を浸食したのである。民政党では増毛，留萌町，苫前村において坂東と浅川の得票数が拮抗する一方で，上記以外の町村では浅川が坂東の 2 倍以上の得票数を獲得している。坂東は留萌支庁管内が浅川の地盤にもかかわらず，多くの有権者を有する増毛，留萌町や民政党の票田の苫前村に進出したのである。

旭川市において，民政党は 5,430 票を獲得し，政友会の 4,078 票を上回っていた。候補者別に見ると，政友会の得票は東と林に 2 分され（1,833 票と 1,883 票），近藤が 362 票を獲得している。他方，民政党の得票は坂東の 4,537 票に対して，浅川は 893 票である[41]。旭川市及び周辺町村を票田とする坂東[42] は政友会の脅威に直面し，浅川の地盤の宗谷，留萌支庁管内に進出せざるを得なくなった。この結果，浅川は当落線上に追いやられることになったと考えられる。

第 2 節　第 2 回普通選挙と近藤豊吉の躍進

1930 年 2 月の第 2 回普通選挙（浜口雄幸民政党内閣が実施）における北海道第 2 区の当選者は浅川（民政党），東（政友会），近藤（政友会），坂東（民政党），落選者は林（政友会），木下源吾（労働農民党，非公認）である。

1 月 29 日，留萌革新倶楽部総会は浅川の支持を決定した。他方，留萌政友倶楽部は連日，幹部会を重ね，選挙対策を行っていた[43]。30 日，留萌政友倶楽部の臨時総会は「東武氏は元来，空知管内より選出されていたものを無理に当管内に懇請して，爾来，数回当選し，衆議院の議政檀上に重きをなし，管内開発の為努力せられたのみならず，先には農林政務次官として国政の枢

機に列して，国民の実生活を向上せしむ為，日夜，心血を注いだ功労は実に偉大なるものあり」と述べている。同日，天塩政友倶楽部が発足し，２月２日の緊急幹部会は満場一致で東の推薦を決定した。２月２日，留萌革新倶楽部（民政党）主催の天塩国民政倶楽部大会が留萌町公会堂において開催された。同大会には留萌，増毛町を中心に天塩沿岸各地から 200 余名が参加し，浅川と坂東の支持を決定した[44]。７日の『北海タイムス』によると，天塩民政倶楽部大会開催以来，「沿岸各地の同志を巧みに糾合し，表面平静を装ひながら，その実，潜航艇式戦法をもって頻りに進出を企て」，坂東は１日，浅川は５日から演説を開始する一方で，「政友派は各候補共，聊か立ち遅れ気味があつて諸般の準備未だ十分に整はず」という状況だったと言う[45]。

だが，与党の民政党は第２回普通選挙において，留萌支庁管内における政友会打倒に失敗した。［表５］を参照すると，留萌，増毛，天塩町における政友会と民政党との得票数の差は前回選挙から拡大している。東は鬼鹿，焼尻，苫前村を除く町村で得票数１位となっているが[46]，ここで着目したいのは留萌政友倶楽部によって，東が空知支庁管内からの「輸入候補」と認識されていることである。なお，東の個人後援会の「牧堂会」は北海道第４区に集中していた（空知支庁管内の深川町，新十津川，月形村）[47]。北海道第２区の地元候補ではなかったことは東の不安要素であり，前述の地盤協定破棄につながったのだろう。

次に，宗谷支庁管内に着目する。明治期の宗谷線建設時において，常盤村以北の径路選択をめぐり，政友会と大同倶楽部は激しく対立していた。すなわち，稚内町に到るまでの日本海側ルート（天塩町方面）とオホーツク海側ルート（頓別村方面）との対立である。前者は東の選挙地盤の留萌支庁管内であり，後者には大同倶楽部の安達謙蔵が大地積を所有していた。両者の対立は 1912 年５月に後者の勝利に帰結し，東は宗谷線を「大同倶楽部線」と批判していた。なお，前者は東の紹介による請願もあり，1917 年３月から天塩線として着工された[48]。1926 年９月の天塩線の全線開通以降，政友会は天塩沿線から宗谷沿線方面にまで党勢を拡大させた。1930 年の第２回普通選挙においては安達が民政党内閣の内相だったにもかかわらず，宗谷沿線方面に

おける政友会の優位は動揺していない。［表 4 ］を参照すると，稚内町，枝幸，頓別，中頓別，猿払村において，前回選挙から得票差を縮小させたものの，民政党は政友会の得票数を上回ることができなかった。

ここで視点を換えて，上川支庁管内における政友会の候補者擁立過程を検討する。1 月 28 日の上士別政友同志会役員会は東と近藤の擁立を決定した[49]。選挙結果に着目すると，上士別村における近藤の得票数が 565 票（前回 416 票）だったことに対して，東は 205 票（前回 302 票）だった[50]。2 月 1 日の名寄政友倶楽部役員総会は「倶楽部は一致協力，東候補を推薦し，別に倶楽部有志を以て近藤候補後援会を組織し，隣接地としての情誼を立つべし」ということを決定した[51]。名寄政友倶楽部は前回選挙に続いて東を推したが，今回は隣接地を理由に，近藤の支持勢力が独立している。政友会の地方組織と個人後援会が分裂したのである。選挙結果に着目すると，名寄町における近藤の得票数が 741 票（前回 360 票）だったことに対して，東は 420 票（前回 851 票）にすぎなかった[52]。2 月 5 日の士別政友倶楽部協議会は「三候補を同時に推薦するは策の得たるものにあらずとなし，東武氏一人を推薦し，極力応援することに満場一致で決定した」[53]。［表 3 ］を参照すると，第 2 回普通選挙において，上士別村，名寄町ともに，野党の政友会の得票数が与党の民政党を上回っているが，士別町では政友会が民政党を下回った（和寒村を除いた近隣町村の政友会の得票は民政党を上回っている）。なお，浅川は士別町において木材会社を経営していた[54]。士別町選出道議の菅原太吉は同町を民政党の影響下に置こうと画策していた[55]。士別町において，政友会は民政党打倒のため，東に得票を集中させる必要があった。政友会の候補者別選挙結果に着目すると，士別町における東の得票数は 244 票（前回 442 票），近藤は 327 票（前回 203 票），林は 228 票（前回 254 票）だった。すなわち，士別政友倶楽部の東への集票は成功していない。

第 2 回普通選挙において着目されるのは，上川支庁管内における近藤の得票数が前回選挙の 4,206 票から 8,117 票に激増したことである[56]。1932 年 2 月 5 日の『小樽新聞』によると，近藤の立候補は「地方的であつたため，全く各町村共に超党派的に擁護，支持した」と言う[57]。他方，上川支庁管内にお

ける林の得票数は前回選挙の 9,842 票から 7,894 票，東の得票数は前回選挙の 7,079 票から 4,824 票に激減している[58]。東にはこの失敗を補完し得る宗谷，留萌支庁管内という票田があったが，上川支庁管内を唯一の選挙地盤とする林は落選した。林は 1930 年 1 月 31 日の『旭川新聞』において「今度の選挙は近藤，林の戦争で近藤，浅川の対抗戦などと見るのは皮相の感である」と語っていた。２月３日の同紙によると，近藤が「殊に上川中央部に主力をそそいだ事が策の得たものである。近藤候補の中央部進出によつて，一番打撃を被るのが林候補である」，それは林が「上川中央部が唯一の地盤」としているためだと言う。近藤の進出のため，林は前回選挙のように自らの地盤の防衛に専念できなくなり，東の地盤（宗谷，留萌支庁方面）への進出を余儀なくさせられた[59]。選挙結果を見ると，宗谷，留萌支庁管内の林の得票数は増大しているが（104 票から 285 票，178 票から 741 票），上川支庁管内の敗北を補填するには至っていない。

上記のことを踏まえ，上川支庁管内の町村における近藤と林の選挙結果を比較したい。まず，近藤の得票数は出身の多寄村と剣淵村以外の町村において増大している（両村の得票数１位は近藤）。この結果は近藤に対して，各町村が超党派的支持を行ったことを裏付けている。近藤は，前回選挙において東に地盤協定を破られたことで落選し，道議となっていた。上川支庁管内の町村における超党派的支持の背景には，近藤への同情があったようである。他方，林の得票数は 22 の町村（全 30 町村）において減少し，自らの地盤（東鷹栖，神楽，神居，東旭川，上富良野，中富良野，東川，永山，当麻，愛別，江丹別村）における大幅な減少は打撃だっただろう。

ここで，政党別に選挙結果を検討する。［表１］，［表２］，［表３］を参照すると，第２回普通選挙において，野党の政友会は上川支庁管内における優位を保持している。江丹別，山部，和寒，士別村を除く全町村において，政友会の得票は民政党を上回った。候補者別に選挙結果を見ると，林の出身の当麻村と近藤の出身の多寄村及び比布，神居村（林に集中），美深町，下川，中川，温根別村（近藤に集中）を除いた全町村において，政友会候補の得票は３者に分散していた。民政党に視点を転じると，浅川は名寄，美深町と上川，

和寒，上士別，山部村において，坂東の２倍以上の得票数を獲得した。上記の町村以外では坂東と浅川の得票は拮抗した。浅川の得票は，18 町村において前回選挙から倍増している[60]。近藤の躍進だけではなく，浅川の進出も，林落選の要因だったことがわかる。

視点を換えて，宗谷，留萌支庁管内の選挙結果に着目したい。［表４］を参照すると，第２回普通選挙では宗谷，香深，船泊，鴛泊村を除く宗谷支庁管内の全町村において政友会の得票数は民政党を上回っている。候補者別得票状況に着目すると，政友会では前回選挙同様，林への得票がほとんどなく，枝幸，香深村（東に集中），鬼脇村（近藤に集中）を除く町村では，東と近藤の得票数が拮抗している。対照的に，沓形村を除くすべての町村において，浅川が坂東の２倍以上の得票を獲得した。なお，浅川の得票は，７村において前回選挙から倍増している。前回選挙と異なり，１町村の有権者の投票が浅川に集中した結果，浅川の得票は激増したのである。［表５］を参照すると，第２回普通選挙では苫前，焼尻村を除く留萌支庁管内の全町村において政友会の得票数は民政党を上回っている。留萌支庁管内の町村における候補者別得票状況に着目すると，政友会では鬼鹿，幌延村を除く全町村において東に得票が集中した。他方，民政党は前回選挙から一転して，全町村において，浅川が坂東の２倍以上の得票数を獲得した。なお，浅川の得票は天売，幌延村において前回選挙から倍増している。宗谷支庁管内と同様，１町村の有権者の投票は浅川に集中している。坂東との競合を避けることで，当落線上にあった浅川は１位当選を果たした。このことは，安達謙蔵内相の選挙戦略の成果であろう。

最後に，旭川市の選挙結果に着目する。民政党は 5,751 票を獲得し，政友会の 4,621 票を上回った（その他は 393 票）。候補者別に見ると，政友会の得票は東，近藤，林に３分されている（1,660 票，1,494 票，1,467 票）。他方，民政党の得票は坂東の 3,973 票に対して，浅川は 1,778 票である[61]。前回選挙と比較すると，坂東は近藤と浅川に地盤を浸食されたと言えるだろう。林は２月８日の旭川市の政権発表演説会において，金解禁政策を批判していた。同日，元道庁長官の俵孫一商相が坂東と浅川の応援のために旭川市を訪問し

た。政権発表演説会において，坂東は政友会の「七大政策」を批判，浅川は政友会と民政党の政策を比較し，俵商相は金解禁と緊縮政策を説明していた[62]。例えば，林の地盤の上富良野村では金解禁政策への「満足」を表明し[63]，浅川の得票は前回の 118 票から 321 票に増大し，林は 549 票から 420 票に減少している[64]。浅川の１位当選の背景には，浜口内閣の金解禁政策に対する有権者の支持があったと考えられる。

第３節　第３回普通選挙と浅川浩の落選

1932 年２月の第３回普通選挙（犬養毅政友会内閣が実施）における北海道第２区の当選者は東（政友会），林（政友会），田中喜代松（政友会），坂東（民政党），落選者は浅川（民政党）のみである。

１月 20 日，留萌政友倶楽部と留萌立憲青年同志会の連合総会は「来る休会明け，若し解散となつた場合は留萌築港，留萌線，その他，産業方面に直接，我が町の為め，不断の努力をなせる現代議士，東武氏を積極的に支持，後援すること」を満場一致で可決している[65]。30 日の『旭川新聞』は留萌地方を「東派王城の地」と評している[66]。上川支庁に転じると，比布村の村上元吉後援会は１月 24 日の幹部会において本人の希望にかかわらず，村上（上川支庁選出道議）を擁立することを決定した。他方，旭川政友倶楽部の幹部は村上の決起を断念させようとしていた[67]。26 日，村上は旭川市における民政党の地盤を根底から覆す目的で，田中に譲り，出馬を辞退した[68]。28 日には，旭川市において，田中喜代松後援会（喜政会）の総会が開催されている（1500 名が参加）[69]。他方，２月５日には，東川村において，坂東幸太郎後援会が発会し，300 余名が参加した[70]。東川村における坂東後援会発足の背景には，旭川市以外にも有力な票田を構築しようという坂東の思惑があったように思われる。

第３回普通選挙において重要なことは，前回総選挙において，上川支庁管内町村の超党派的な支持を受けた近藤の病死である。近藤の地元の多寄村においては，青年団幹部の満田宇一郎が中心となり，東武後援会を組織した。１月 29 日の『北海タイムス』によると，同会の目的は「現下の農村窮状を打

破するには，東氏の如き農政の権威者を議政檀上に立たしむるのが喫緊の要事である」ということにあった[71]。東は 12 日の政府与党懇談会において，産業五ヶ年計画に関して熱弁をふるっていた[72]。多寄村は農業地帯であり，近藤の支持勢力は農政会の一員の東に対して，農村生活の安定を期待したのだろう。他方，30 日の『旭川新聞』は田中について「故近藤氏の応援関係有志との絶対的な連絡もあり」と述べている[73]。だが，近藤の息子の近藤一が林を推薦した結果，田中派は反発し，田中こそが「近藤の遺志を継ぐもの」と宣言した[74]。選挙結果を見ると，多寄村の得票は林 554 票，田中 634 票，東 245 票である[75]。近藤の地盤は 3 者に分割されたと考えられる。

他方，林は「今回の総選挙は，私にとりましては敗戦後の決戦的此一戦とも申すべき総選挙であります。ここに私は皆さんに慚愧の衷情を披瀝して深くお詫びすると共に，二年間忘れんとして忘るることの出来ない今日の機会を待ちつつ，今やその機会に臨むを得たのであります」，「私は道政十年，その間のある時は家産をこれに投じ，またある時は死生の境を彷徨しまして今日に至りましたが，この政治的生命は此一戦にかけられているのであります」と演説していた。林の伝記によると，この演説は「子供の口真似が津々浦々に亘つて一時流行したほどだった」と言う[76]。2 月 16 日の『旭川新聞』は，「心ある者は非常に同情を寄せて身を挺して林候補のために奮闘をなしているから，苦戦ながらも今回だけは落胆のうき目を見るようなとは万なからうと一般において観測している」と評している[77]。前回選挙の近藤と同様，落選して道議となっていた林に対して，有権者からの同情が集まっていたことがわかる。

ここで，政党別に選挙結果を検討する。［表 1］，［表 2］，［表 3］，［表 4］，［表 5］を参照すると，香深村を除く北海道第 2 区の全市町村において，政友会の得票は，民政党を上回った。候補者別に選挙結果を見ると，上川支庁管内において，政友会は和寒（東に集中），当麻村（林に集中）を除き，東，林，田中に票が分散している。民政党は富良野町，上富良野，比布，智恵文，多寄，常盤村において坂東，上士別村において浅川に集中した以外は，両者に票が分散した。なお，浅川の得票は 14 町村において前回選挙から半減した。

宗谷支庁管内において，政友会は東，林，田中に票が分散した。民政党は猿払，沓形村において坂東，中頓別，枝幸，鴛泊村において浅川に得票が集中した以外は両者に得票が分散した。なお，浅川の得票は６村において前回選挙から半減している。留萌支庁管内において，政友会は増毛町と小平藁，天売，焼尻，遠別村において東に得票が集中したが，上記の町村以外では東，林，田中に票が分散した。民政党は天塩町と初山別，天売，遠別村において浅川に得票が集中したが，上記以外の町村では浅川と坂東に票が分散した。なお，浅川の得票は，５町村において半減している。旭川市において，政友会は田中（4,913 票），民政党は坂東（3,642 票）に得票が集中した。なお，浅川の得票（916 票）は，前回選挙（1,778 票）から激減している[78]。

前回選挙において１位当選を果たした浅川の落選は，安達脱党による民政党の混乱と同党内閣の金解禁政策の破綻を象徴している。政友会は３議席を獲得したが，東，林，田中の関係は良好ではなかった。

第２章　政党内閣崩壊後における北海道第２区の政治状況

本章は，政党内閣崩壊後における２度の普通選挙と北海道第２区の関係を政党と候補者の観点から検討する。

第１節　第４回普通選挙と林路一の進出

1936 年２月の第４回普通選挙（岡田啓介内閣が実施）における北海道第２区の当選者は，東（政友会），林（昭和会），浅川（民政党），坂東（民政党），落選者は田中（政友会）のみである。なお，岡田内閣の与党は民政党と昭和会，野党は政友会だった。

民政党は反橋信一（上川支庁道議），西岡斌（宗谷支庁道議），栗山弘忠（留萌支庁道議）が反幹部派を標榜し，反橋擁立に固執したが[79]，浅川と坂東の２名の擁立に決定した。他方，政友会は昭和会の林の挑戦を受けることになった。第１回普通選挙において東が地盤協定を破って以来，林と東は同一政党でありながら対立してきたが[80]，袂を分かった。１月 24 日の『小樽新聞』は

「政友の林路一君は政友の御大，東武君とは同一地盤であるが元来，東君とはソリが合はず，兎角疎遠となり，木下支部長と肝胆相照らすの間にあつた」，「従来，林君には，いわゆる政友票のはいつたことは勿論であるが，特別に林信者も相当ある様であるから，必ずしも悲観の要はあるまい」，２月 13 日の『北海タイムス』は「政友会を脱して昭和会に転身したりとはいへ，林候補に従来応援せる地盤の動揺は今の処一部を除けば，割合少ないようであつて，最も優勢を伝へられている」と評している[81]。政友会を脱党した林は，従来から個人への支持票が多く，地盤の動揺が少ないと見られていたのである。

富良野地方では，東と林による激戦が展開された。東は明治後期において下富良野線（滝川，富良野間）の敷設に尽力した経緯があり[82]，富良野地方に影響力を持っていた。当初，林は言論戦，東は文書戦に主眼を置いていた。２月 17 日の『旭川新聞』は「東派は最後の突撃に入るべく，候補自身が十七日，駒を上富良野，中富良野，富良野の各町村にすすめ，票田を一気に獲得すべく，言論戦に一段の拍車をかけることになつたが，同派の奇襲に打撃をかうむり，苦戦を予想されていたのが，林派は勢力の固守と東派の切崩しに猛烈，鎬を削つている，殊に上富良野村の林派有志は他候補の票田蚕食に備えるため，第三者の推薦状を山本一郎氏外数名によつて差し出す等地盤の死守に努め，頗る有利に展開している」と報じている[83]。第４回普通選挙の結果を見ると，富良野町と中富良野村では東の得票（715 票，539 票）が林（559 票，319 票）を上回ったが，上富良野村では林の得票（532 票）が東の得票（430 票）を上回っている[84]。前回選挙では，３町村において林の得票が東を上回っており，林は中富良野村まで東の進出を許したと言えるだろう。

ここで着目したいのは，富良野町における林の後援会「路一会」の発足である。1936 年３月，路一会は林が広田弘毅内閣の拓務参与官に就任したことを機に，富良野町の医師の篠田栄を中心に，組織された。９月 24 日に開催された発起人会には富良野町，上富良野，南富良野，山部村から代表者が参加した。発会式は，10 月４日，富良野町に林を迎えて行われた。路一会が発足した背景には，次回選挙における東との競合に備え，陣営の結束を強化しようという林の意図があったのだろう[85]。

前回選挙から比較すると，上川支庁管内における第４回普通選挙の東の得票は 8,584 票から 10,273 票に増大する一方で，林の得票は 14,076 票から 13,107 票に減少している。林の地盤に侵入した東の戦略は一定程度，成功しているように見えるが，林の総得票（19,527 票）は前回選挙からほとんど変化していない（前回は 19,538 票）。これは，旭川市における林の得票が前回選挙から大幅に増大していることに基因している（922 票から 1,853 票）[86]。２月７日の『旭川新聞』は「政党政派の如何を問はず，林候補を支持する者が相当あり。現に旭川市においても林ファンが続出し，少なくとも前回の倍以上の得票があるものと見られている」と報じ，14 日には「従来のやうに，ただ単に政友か，民政かといつた漠然たる実在より，実際に問題に即した政策即ち農民生活と密接重大な関係を持つ米穀自治処理案（筆者注：米穀自治管理法案）など，更生農村のスローガンとなつているだけに従来の如き浮薄なる戦術では到底選挙民を引き入れるわけには行くまい」と評している[87]。手塚雄太氏が指摘するように，東が立案の中心となった米穀自治管理法案は米穀統制組合の事業を産業組合（産業組合が存在しない地域は農会）が代行できるとされており，これまで米穀の配給機能を担ってきた米穀商から猛反発を受けた経緯があった[88]。米穀商の不振は旭川市においても深刻なものであり[89]，林は東の批判票を吸収したのだろう。

北海道稲作の中心地の東旭川村[90]ではどうだろか。２月 18 日の『北海タイムス』は「第二区には先に帝国農会幹事高島一郎氏が本道出張の序に東候補を応援して東旭川の二箇所で演壇に起ち，更に今回，全国農林組合協会幹事島田日出夫氏も本道視察旅行の途次，去る十五日から，連日，同候補遊説隊に加はり，応援演説会を為し，選挙民に歓迎されて居るが，之は第二区応援弁士中の異色あるものとされて居る」と報じている[91]。林の地盤の東旭川村では，米穀自治管理法案を推進していた農会が東を支援した[92]。だが，第４回普通選挙の結果に着目すると，東旭川村では林の得票（722 票）が東（513 票）を上回っている。前回選挙から両者の得票はほとんど変化しておらず（林は 720 票，東は 548 票），林は東の攻勢を防いだのである。他方，浅川の票は，前回選挙の 154 票から 331 票に増大している（第１回普通選挙の浅川の得票

は 192 票，第 2 回普通選挙は 400 票）。浅川が東旭川村の浮動票を吸収していたことがわかる。

ここで，政党別に選挙結果を検討する。上川支庁管内では民政党の得票数（14,891 票）が初めて政友会（13,778 票）を上回った[93]。［表 1］，［表 2］，［表 3］を参照すると，上川支庁管内の 13 町村において，民政党は得票数 1 位となった（政友会の得票数 1 位は 10 町村）。さらに，名寄町，神居，上川，永山，当麻，愛別，温根別，剣淵村において昭和会（林）の得票が政民両党を上回った。候補者別に選挙結果を見ると，政友会は，21 町村において，東に得票が集中しており，同士討ちを行う余力がなくなっていることがわかる。民政党は，東川，美瑛，多寄村において坂東，士別，名寄，美深町と上士別，中川村において浅川に得票が集中しているが，上記以外の町村では両者に得票が分散している。

上川支庁管内と同様，宗谷支庁管内では，民政党の得票数（4,698 票）が初めて政友会（4,414 票）を上回った。［表 4］を参照すると，宗谷支庁管内の 7 町村において，民政党は得票数 1 位となった。政友会は 5 村において得票 1 位となったが，昭和会が得票数 1 位の町村はない。候補者別に選挙結果を見ると，政友会の得票は全町村において，東に得票が集中している。民政党の得票は頓別，枝幸，香深，鴛泊，仙法志村において浅川に得票が集中する一方で，上記以外の町村では浅川と坂東の得票が分散している。［表 5］を参照すると，留萌支庁管内では，苫前村（民政党が得票数 1 位）を除く全町村において，政友会が得票数 1 位となった。宗谷支庁管内同様，林は東の地盤に脅威を与えていない。候補者別に選挙結果を見ると，政友会の得票は宗谷支庁管内同様，全町村において，東に得票が集中している。民政党の得票は天塩町と初山別，天売，遠別村において浅川に得票が集中する一方で，上記以外の町村では浅川と坂東に分散している。宗谷，留萌支庁管内ともに，政友会のほうが民政党よりも集票傾向にある。

旭川市の選挙結果に着目すると，民政党は 6,848 票を獲得し，政友会の 4,261 票を上回った。前回選挙において，田中の得票は 4,913 票から 3,050 票に減少した。他方で，浅川の得票は前回の 916 票から 2,770 票に増大して

いる[94]。林と浅川の進出は必然的に旭川市を地盤とする田中を脅かした。政友会は宗谷，留萌支庁全域及び上川支庁の広域において東に集票しており，田中は旭川市外にほとんど進出できず，落選した。

林は岡田内閣の与党の地位を利用して総選挙に臨んだ。名羽線（名寄，羽幌間）分岐問題が名寄町と多寄村の間で生じた際，林は内田信也鉄相に働きかけ，名寄町に決定した。この結果，名寄町の有権者の多くは総選挙の際，林を支持した[95]。選挙結果を見ると，名寄町の林の得票は前回選挙の 614 票から 1,075 票に増大し，665 票の東を上回っている[96]。

以上のように，政友会を脱党した林は昭和会候補として東に挑戦し，政友会の党勢を半減させた。岡田内閣の与党の民政党と昭和会は，北海道第２区における政友会の優位を破ることに成功したのである。

第２節　第５回普通選挙と木下源吾の挑戦

1937 年４月の第５回普通選挙（林銑十郎内閣が実施）における北海道第２区の当選者は，東（政友会），林（昭和会），坂東（民政党），松浦周太郎（民政党），落選者は木下源吾（社会大衆党），高橋日出男（政友会），反橋信一（民政党）である。なお，林内閣は超然内閣であり，政民両党打倒のため，突如として議会を解散した。

民政党においては，北海道支部長を務めた浅川が引退した。４月 14 日，浅川は松浦と会見し，松浦の推薦と自身の出馬辞退を決定した[97]。18 日の『旭川新聞』は「本道五区中，第一の混戦混乱を予想されている第二区」と評し，「美深を中心に宗谷一帯に根強い地盤を有する松浦候補はまづ，富良野，旭川を攻めて戦ひを有利にせん」としていることを報じている。当初，松浦は西岡の出馬辞退によって，西岡から支援を得られるだろうと期待していた。だが，23 日の『旭川新聞』は「西岡氏は辞退と同時に既成政党に見限りをつけて，新党に走らんとする意気込みであり，管内の民政党候補に全然関係しないと声明したので，松浦候補としては期待の裏切られたもの多く，危機の淵に落されており，悲壮なる政戦を続けている」と報じている。さらに，「栗山は行方をくらまして内地に応援と称して逃避してしまった」と言う。27 日の

『旭川新聞』は「浅川の地盤が全部，松浦に傾くといふことは考へられない」と報じている[98]。上川の反橋の立候補，宗谷の西岡と留萌の栗山の離反によって，松浦は苦戦を強いられた。

本論が着目したいのは，社会大衆党の木下と昭和会の林が政民両党に対する批判的立場を鮮明にしたことである。4 月 19 日，『旭川新聞』主催の各候補政見演説会において，木下は「国民生活の安定について，吾党は既成政党や現内閣では断行することの出来ぬ実行すべき手段方法の特異性を有つている」と述べ，林は「今回の解散は決して妥当ではない，故に我々は正しい認識を有する同志のみが抱き合つて，渾然，新党を樹立し，非常時局を打開せねばならぬと主張するのである」と演説していた[99]。なお，林は，2 月から有馬頼寧の近衛新党運動に参加していた[100]。22 日の『旭川新聞』は，林が「今回は更にそうした共鳴者が増大し，新党実現には各階を通じ期待しつつあり。新党のためなら一肌ぬいでもいいといふ者さへ現れ，時代の人気に乗っている」と報じている。他方，林は「新党樹立の大立者」，「政民両党の挟撃」に「苦戦」とも報じられていた[101]。

ここで着目したいのは，1936 年 11 月 9 日，社会大衆党旭川支部が発足していることである[102]。有馬学氏の「日中戦争と社会大衆党」によると，1936 年から 1937 年にかけて，社会大衆党の地方支部を中心とする組織拡大はかなりのものがあり，全国的に農民の入党が進んでいたと言う[103]。1937 年 4 月 18 日の『旭川新聞』は，木下が「旭川市を中心に勤労大衆に呼びかけ，各派の混戦に散票，浮動票を狙ひつつ，相当有利にすすめている」，「その言論戦を唯一の武器に，相当根強く勤労農民大衆に食ひ込み，農村を地盤とする強剛候補を恐れしめている」，「無産者ばかりではなく，インテリ階級票も相当かきあつめることになろう」と評している。選挙終了後，坂東の選挙参謀の前野与三吉は「戦ひの当初は多少楽観していたが，中頃となつて，社大の進出著しいのに，各候補も亦，旭川中心の牙城に迫つて来るのを感じ，これではならぬと戦線を引きしめた」と述べている[104]。旭川市と近郊農村の木下支持は，民政党の坂東に脅威を与えるものであった。

ここで，政党別に選挙結果を検討する。まず，上川支庁管内全体では，昭

和会と社会大衆党の合計得票数（28,304 票）が政友会と民政党を上回った（11,135 票，13,923 票）。［表１］を参照すると，中部（旭川市近郊）では，東川村（坂東後援会がある）と愛別村（反橋の地元）を除く全村において，昭和会と社会大衆党の合計得票数が政友会と民政党を上回っている。［表２］を参照すると，南部では，山部，南富良野，占冠村において昭和会と社会大衆党の合計得票数が政民両党を上回っているが，美瑛，上富良野村では民政党，中富良野村と富良野町では政友会が得票数１位である。［表３］を参照すると，北部では，和寒，温根別，剣淵村と名寄町において昭和会と社会大衆党の合計得票数が政民両党を上回っているが，上記以外の町村では政民両党の牙城を崩せていない。候補者別に選挙結果を見ると，政友会は士別町と剣淵，温根別，上士別，多寄，智恵文村を除く全町村において東に得票が集中している。民政党は江丹別村と富良野町において坂東，愛別村において反橋，士別，名寄，美深町，上士別，下川，智恵文，常盤，中川村において松浦に得票が集中する一方で，上記以外の村では３者の得票が分散している。社会大衆党の木下は 4,019 票を獲得したが，１位の町村はなかった。

視点を換えて，宗谷，留萌支庁管内に着目する。［表４］を参照すると，宗谷支庁管内では，猿払，鴛泊，鬼脇村（いずれも林が１位）以外の町村において，昭和会と社会大衆党の合計得票数は政友会と民政党を上回ることができなかった。候補者別に選挙結果を見ると，政友会の得票は全町村において，東に集中している。対照的に，民政党の得票は宗谷村において坂東，中頓別，枝幸，香深村において松浦に集中したものの，上記以外の町村では坂東と松浦に得票が分散した。［表５］を参照すると，留萌支庁管内では，全町村において，政友会が１位となった。政友会の勝因は，全町村において東に集票したことにある。民政党の得票は増毛町で坂東，天塩町と遠別村で松浦に集中したが，上記の町村以外では坂東と松浦に得票が分散した[105]。宗谷，留萌支庁管内において，民政党よりも政友会のほうが集票傾向にあるのは前回選挙と同様である。

旭川市の選挙結果に着目すると，民政党は 5,409 票を獲得し，政友会の 2,073 票を大きく上回った。昭和会と社会大衆党の合計得票数は 4,061 票で

あり，政友会を上回っている。民政党は坂東が 3,817 票（前回は 4,078 票）を獲得し，当選したことが大きい。社会大衆党の木下は坂東に次ぐ，2 位の 2,155 票を獲得している。昭和会の林は 3 位の 1,906 票で前回（1,853 票）から得票をやや伸ばしている。政友会は前回選挙において 3,050 票を獲得した田中が立候補していないにもかかわらず，東の得票の伸びは大きくない（1,210 票から 1,802 票）。高橋の得票はわずか 312 票であり，旭川市における政友会の党勢縮小は決定的なものとなった[106]。

松浦の選挙結果と前回選挙における浅川の得票を比較すると，地盤継承が十分な効果を発揮していないことがわかる。上川支庁管内に着目すると，松浦の得票は名寄，美深町と上士別，多寄，下川，智恵文，常盤，中川村という北部において浅川を上回ったが，上記以外の町村では上川村を除き，浅川を下回っている。松浦の得票は頓別村を除く宗谷支庁管内の全町村において，留萌支庁管内では全町村において，浅川を下回った。旭川市の松浦の得票は 1,280 票であり，浅川の 2,770 票を下回っている[107]。選挙直後，松浦の選挙参謀の水上政治は「旭川支部の開票の結果，予想以上の好成績をあげたけれども，上川，留萌，宗谷の各地方における成績，甚だ振はず，随分焦慮しましたが，本当の戦は名寄以北と覚悟して居た」と語っている[108]。松浦の勝因は，地元の美深町を中心に上川地方北部の票を固めたことにあったと言えるだろう。

全体的に見ると，第 5 回普通選挙では，上川支庁管内において昭和会と社会大衆党の合計得票数（38,873 票）が政民両党を上回った。だが，昭和会の林と社会大衆党の木下の得票が増大したのは，旭川市と近郊町村（上川支庁管内中部）及び名寄町周辺に限定されていた。政友会は宗谷，留萌支庁において東に集票することで（高橋を犠牲にすることで）東の 1 位当選に成功したが，前回選挙からさらに得票数を減少させた（29,739 票から 23,250 票）。政友会は，政党内閣時代のように，同士討ちを許容することができなかった。他方，民政党の得票が前回選挙から減少した（30,895 票から 25,809 票）[109] 要因として，想定外の議会解散ゆえに浅川から松浦への地盤継承が不十分だったことが考えられる。換言すると，民政党は，上記の混乱の影響を最小限に

抑えることが可能だったのである[110]。

結

北海道第２区では，政党内閣時代の第１，２，３回普通選挙において，二大政党（政友会と民政党）の激しい競合が展開された。その際，政友会は民政党に対して相対的優位を確保していたが，政党内閣崩壊後において，状況は一変した。第４，５回普通選挙において民政党が党勢を維持したことと対照的に，政友会は東武に得票を集中させ，東の従来の地盤を維持することしかできなかった。政友会の地盤の一部（旭川市，上川支庁管内町村）は昭和会と社会大衆党に浸食され，道北の政治は多党化したのである。上記のことを踏まえ，序において提示した課題を整理したい。

第１の課題に着目すると，北海道第２区の有権者には所属政党を越えて地元候補に投票する傾向が見られた。第２回普通選挙においては，前回選挙において落選した地元候補に対する同情票が集まり，近藤豊吉（多寄村）が当選した。第４回普通選挙では政友会を脱党したにもかかわらず，林路一（当麻村）の地盤に動揺がほとんどなかった。道北の有権者は移住者間の結びつきが強く，地域社会の代表者である地元候補を個人の観点から選択する場合があったのである。

第２の課題に着目すると，北海道第２区においては，同一政党の候補者が一町村で票を奪いあった。第１回普通選挙において，政友会の東が林，近藤との地盤協定を破棄したことは象徴的である。民政党に着目すると，第１，３，４回普通選挙において，坂東幸太郎と浅川浩の間では地盤協定がなされなかった。第５回普通選挙においても，浅川の後継者の松浦周太郎，坂東，反橋信一による同士討ちが展開された。他方で，北海道第２区においても，集団投票が確認された。政友会に着目すると，留萌支庁管内町村では，第３回普通選挙を除く４度の選挙において，東への集票が確認された。政党内閣崩壊以後の第４，５回普通選挙では，宗谷支庁管内町村全域及び上川支庁管内町村の大部分においても，東への集票が確認された。民政党は浜口雄幸内

閣下の第２回普通選挙において，北海道第２区の広範囲において，浅川に得票が集中した。道北において集団投票はあったが，有権者が自由に候補者を選択する余地もあったのである。

第３の課題に着目すると，本論において確認された二大政党の地方組織は，旭川，稚内，留萌，天塩，名寄，士別政友倶楽部，上士別政友同志会（政友会），旭川民政党同志会，天塩国，名寄民政倶楽部（民政党）である。その中で，候補者擁立の中心となったのは，旭川政友倶楽部と旭川民政党同志会だった。政党内閣時代の総選挙において，政友会が有利に戦うことができたのは集票を担う地方組織が民政党よりも成熟していたためだろう。他方，個人後援会については，林（当麻，神居村，富良野町），近藤（名寄村），村上元吉（比布村），田中喜代松（旭川市），坂東（東川村），東（多寄村）が確認された。なお，候補者擁立過程においては，政友会の地方組織と個人後援会との間で対立が生じる場合があった（名寄政友倶楽部と近藤後援会，旭川政友倶楽部と村上後援会）。個人後援会の積極的な活動が政党の地方組織の集票を妨げた側面もある。

以上のように，北海道第２区の事例は，昭和戦前期日本の普通選挙と政党を研究する上で，北海道が重要な地域であることを示している[111]。

注

1　拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」『道歴研年報』（第 19 号）2018 年。
2　升味準之輔『日本政党史論』（第５巻）東京大学出版会，1979 年，227～257 頁。
3　拙著『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会，2019 年。
4　浅野和夫「戦前総選挙における集団投票」『大麻唯男』（論文編）櫻田会，1996 年，317 頁。
5　山室建徳「一九三〇年代における政党基盤の変貌」日本政治学会編『近代日本における中央と地方』岩波書店，1985 年，奥健太郎『昭和戦前期立憲政友会の研究』慶應義塾大学出版会，2004 年。
6　手塚雄太『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』ミネルヴァ書房，2017 年。
7　旭川市中央図書館所蔵マイクロフィルム『旭川新聞』を『旭新』，北海道大学附属図

書館所蔵マイクロフィルム『北海道タイムス』を『北タイ』，北海道大学附属図書館所蔵マイクロフィルム『小樽新聞』を『樽新』と略記し，年月日のみ表記する。

8 ［表１］～［表５］において，(1) ～ (5) は第１回から第５回までの普通選挙，「政」は立憲政友会，「民」は立憲民政党，「他」は政友会と民政党以外の政党（労働農民党，日本農民党，昭和会，社会大衆党）を指す。いずれも，「第十六回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1928 年），「第十七回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1930 年），「第十八回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1932 年），「第十九回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1936 年），「第二十回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1937 年）から作成した。

9 『北タイ』（1928 年１月 27 日），『旭新』（1928 年１月 27，31 日，２月３日）。

10 旭川市中央図書館所蔵，山下龍門編『林路一伝』林路一伝刊行会，1939 年，70 頁。

11 『旭新』（1928 年１月 26 日）。

12 『樽新』（1928 年１月 26 日），『北タイ』（1928 年１月 27 日）。

13 留萌市編『新留萌市史』留萌市，2003 年，274，275 頁。

14 『北タイ』（1921 年８月 13 日）。

15 「会報」『政友』（第 257 号）1921 年，74，75 頁。

16 田中和夫『北海道の鉄道』北海道新聞社，2001 年，117 頁。

17 「第十五回衆議院議員総選挙一覧」（衆議院事務局，1924 年）。

18 『樽新』（1928 年１月 27 日）。

19 『北タイ』（1928 年１月 27，26 日）。

20 前掲「第十五回衆議院議員総選挙一覧」。

21 『北タイ』（1928 年１月 27，28 日），『樽新』（1928 年１月 27 日）。

22 『樽新』（1928 年１月 27，30，31，26 日）。

23 『北タイ』（1928 年１月 30 日），『樽新』（1928 年２月６日）。

24 『北タイ』（1928 年１月 29 日）。

25 『北タイ』（1928 年１月 28，31 日）。

26 『樽新』（1928 年２月４日）。

27 『旭新』（1928 年１月 28 日）。

28 『旭新』（1928 年２月４，３日）。

29 当麻町史編纂委員会編『当麻町史』当麻町，1975 年，363，364 頁。

30 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」５頁。

31 『旭新』（1928 年２月４日）。

32 『旭新』（1928 年２月４，８，16 日）。

33 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」５頁。

34 『北タイ』（1928 年２月３，５日）。

35 『旭新』（1928 年２月９日）。

36　名寄市編さん委員会編『新名寄市史』（第１巻）名寄市，1999 年，236，237 頁。
37　『旭新』（1928 年２月９日）。
38　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」５頁。
39　『旭新』（1928 年２月１日）。
40　前掲『新名寄市史』（第１巻）237 頁。
41　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」５，６，２，３頁。
42　坂東は石北線速成同盟会に関与した経緯があり，旭川市の周辺町村に支持者を有していた（旭川市中央図書館所蔵「石北線速成請願」『改造評論』1924 年，42，43 頁）。
43　『北タイ』（1930 年２月２日），『樽新』（1930 年１月 28 日）。
44　『北タイ』（1930 年２月２，４，５日），『樽新』（1930 年２月３日）。
45　『北タイ』（1930 年２月７日）。
46　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」８頁。
47　内務省警保局保安課「昭和２年政事関係議会資料」国立国会図書館憲政資料室所蔵「山岡萬之助関係文書」（マイクロフィルム R24，原蔵学習院大学法学部・経済学部図書センター）。「牧堂会」の存在に関しては，手塚雄太氏が言及している（前掲・手塚『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』104 頁）。
48　前掲・田中『北海道の鉄道』145～147，203，204 頁。
49　『北タイ』（1930 年１月 31 日）。
50　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」７，５頁。
51　『樽新』（1930 年２月３日）。
52　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」６，８頁。
53　『樽新』（1930 年２月７日）。
54　旭川市編『前野与三吉伝』旭川市，1981 年，75 頁。
55　『旭新』（1930 年２月１日）。
56　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」６，８，３頁。
57　『樽新』（1932 年２月５日）。
58　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」３頁。
59　『旭新』（1930 年１月 31 日，２月３，16 日）。
60　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」６，８，５，７頁。
61　同上，８，６，３頁。
62　『旭新』（1930 年２月６，９日）。
63　岸本翠月編『上富良野町史』上富良野町役場，1967 年，211 頁。
64　前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」５，７頁。
65　『北タイ』（1932 年１月 21 日）。
66　『旭新』（1932 年１月 30 日）。
67　『北タイ』（1932 年１月 27 日），『樽新』（1932 年１月 27 日）。

68 『北タイ』（1932 年 1 月 28 日）。
69 『北タイ』（1932 年 1 月 29 日）。
70 『樽新』（1932 年 2 月 5 日）。
71 『北タイ』（1932 年 1 月 29 日）。
72 前掲・手塚『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』39 頁。
73 『旭新』（1932 年 1 月 30 日）。
74 前掲『林路一伝』95，96 頁。
75 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」９，10，３頁。
76 前掲『林路一伝』93，94 頁。
77 『旭新』（1932 年 2 月 16 日）。
78 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」９，10，３頁。
79 『旭新』（1936 年 1 月 24 日）。
80 1921 年 8 月 14，16 日の林の日記を見ると，林と東との密着な関係がわかる（前掲『林路一伝』（「日記篇」）30 頁）。東の地盤協定破棄は，林に強い不信感を与えただろう。
81 『樽新』（1936 年 1 月 24 日），『北タイ』（1936 年 2 月 13 日）。
82 富良野町編『開町五十年略史』富良野，1952 年，29 頁。
83 『旭新』（1936 年 2 月９，17 日）。
84 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」11，９頁。
85 前掲『林路一伝』200，201 頁。
86 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」４，３頁。
87 『旭新』（1936 年 2 月７，14 日）。
88 前掲・手塚『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』77 頁。
89 旭川市史編集会議編『新旭川市史』（第４巻・通史４）旭川市，2009 年，269 頁。
90 同上，1020 頁。
91 『北タイ』（1936 年 2 月 18 日）。
92 手塚氏は政党内閣崩壊後における農会が代議士を政策実現に利用していたことを明らかにしているが（前掲・手塚『近現代日本における政党支持基盤の形成と変容』57 頁），東のように，代議士が農会を自らの選挙に利用していた側面もある。
93 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」11，６，８，２頁。
94 同上，11，２，12，４，３頁。
95 田中文吾「名羽線の恩人」，前掲『林路一伝』（「追想篇」）58，59 頁。
96 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第２区」９，11 頁。
97 『旭新』（1937 年 4 月 15 日）。
98 『旭新』（1937 年 4 月 15，18，23，27 日）。
99 『旭新』（1937 年 4 月 21 日）。
100 前山亮吉「「昭和会」の研究」『静岡県立大学国際関係学部研究紀要』（12）1999 年，

108 頁。

101 『旭新』（1937 年 4 月 22，23，24 日）。

102 前掲，『新旭川市史』（第 4 巻・通史 4 ）534 頁。

103 有馬学「日中戦争と社会大衆党」『史淵』（129）1992 年，80，81 頁。

104 『旭新』（1937 年 4 月 21，23 日， 5 月 4 日）。

105 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第 2 区」， 2 ， 13，14 頁。

106 同上， 2 ， 4 頁。

107 同上，13，14，11，12 頁。

108 『旭新』（1937 年 5 月 4 日）。

109 前掲・拙稿「昭和戦前期の普通選挙と北海道第 2 区」 2 頁。

110 これは，町田忠治総裁時代の民政党（拙著『立憲民政党と政党改良』北海道大学出版会，2013 年，第 3 章）の地方政治における影響力の一端を示している。

111 第 2 区以外の北海道の選挙区（第 1 ， 3 ， 4 ， 5 区）については，別稿を用意している。

The competition of political parties in the second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa period

— The north of Hokkaido and political party (sequel) —

Inoue Keisuke

This paper is a sequel to my paper “Universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and the second constituency of Hokkaido”, consider course of changes of the competition between two-parties in second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa. This paper revealed the facts that political situation of the north of Hokkaido changed over from two-parties to many-parties age.

Firstly, the voter in second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa voted for the local candidate.

Secondly, the candidate of the same political party practiced a scramble for a vote in one town and one village in second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

Thirdly, this paper discovered the local institutions of two-parties and the supporters of the candidates of two-parties in second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa.

Examples of second constituency of Hokkaido in the pre-war era of the Showa prove the importance in the research on universal suffrage in the pre-war era of the Showa period and political parties.